Osaka University Knowledge Archive

Title	『古今集通詁』について
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1960, 23, p. 38-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68545
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『古今集通詁』について

宇佐美喜三八

一

『古今集通詁』は富士谷御杖の著作で、古今集の本文の傍らに口訳を添えた注釈書である。この書はいまだ広くは知られておらず、最近刊行せられた『古今集・新古今集』(国語国文学研究史大成7)に掲出の古今集研究書目の中にもその名が見当らない。三宅清氏著『富士谷御杖』第四章第一節の注釈書解題(一六一頁)には、福井久蔵氏の由須園蔵本に拠って、この書の春歌上の終りまでを含む文献が挙げられているが、御杖の著作の一つとして『古今集通詁』の名を掲げ、その内容を紹介したものは、現在のところ目に触れないように思われる。それで今ここにこの御杖の著作について解説的に考察を試み、いささか私見を述べてみようと考える。

わたくしの手許にある『古今集通詁』は古今集二十巻の巻第十物名までを上巻、巻第十一恋歌一から後を下巻として二冊から成っている。上巻下巻ともに表紙の外題には「古今集通詁」とあるが、巻初の内題には「訳古今集」と記されていて、使用した古今集の本文は流布本系統のものである。ところが家蔵本では、注釈の口訳が巻十五恋歌五の途中、詳しくいえば業平の「ゆきかへり」(国歌大観番号七八五)の歌で終り、その後の部分は古今集の本文だけを書いて注釈が記入せられていない。御杖がそこで注釈の筆を投じたか否かは疑問である。また家蔵本には奥書はなく、巻初に附した「おほむね」の末尾に、

文化二年なが月のはじめ北辺のよもぎがまどにしるしはてき
ふぢはらのなりはる

と書かれている。文化二年に藤原成元すなわち御杖は三十八歳であって、それから十八年後の文政六年八月、彼は五十六歳で歿した。年代的に見れば、御杖には『古今集通詁』の注釈の業を、古今集の巻軸に及ぼす余裕はあったと思われる。この数年の間、古今集全巻を注釈した『通詁』の伝本はないかと心にかけているが、今日に至るまでその種の本にはまだ接していない。

さて『古今集通詁』の著作の趣旨や用意などは、巻初にある前記の「おほむね」に述べられている。先ずそれについて解説をしておく必要があろう。冒頭の一節を掲げると次の通りである。(句読点および濁点をつけて示す。以下同様)

凡ふる言に里言をあてゝ心えさする事は、わが父成章をおやとして、近比は世にもうちまねぶ人も聞ゆれど、もとより三具の

けぢめをもよく弁へずして、わたくしにあつるが故に、のりとするにたらず。成章がかのいとなみ、もとより言の本末通別をさだめて里せられたれば、さるたぐひにあらず。くはしくは脚結抄のおほむねをみてしるべし。此古今集は、成章が口づからつたへられしをうしなはじとおもふ心をしるべとして、おちたる所々は成章がこゝろをえて里したるなり。げに五種不翻ことはりなる事にて、いにしへは歌の詞やがてたゞごとなりしかば、後のよの人ばかり歌よむに事しげからざりしなるべし。言おほくはひなびさとびゆきたる世にうまれいでて、むかし人のしらぬいとまいりをする事、はれも人もいとやむことなき事なりかし。

『古今集通詁』は御杖の著作に相違はないが、右によれば、その内容は父成章の口述を支柱として成立したものということになる。成章が歿したのは御杖が十二歳の時であって、右の「おほむね」はそれから二十六年後の文化二年に書かれている。その前年の文化元年四月に書いた『百人一首燈』の大旨の中において、御杖は「わが父成章はいとはやくうしなひて、なにの心ばえもロづからは聞かざりしに、をぢなりし成均、たゞおほやうに聞おかれたりしは、歌に道あり、……（下略）」と述べており、父の成章から歌の道について聞く所がなかったとすれば、同じように父の口からは古今集の講義も聞いていなかったのではないかと思われる。たとえ聞いていたとしても、それは十二歳以前の幼年時代のことで、その頃の父の口述を三十八歳の時まで宙で覚えていたとは考えられない。要するに、成章の口述を誰かの書きとどめた文献があって、『古今集通詁』はそれをしるべとして書かれたものと見なければならないであろう。

御杖は右の「おほむね」の初めに、古言の意味を里言をあてて心得させる方法は、父の成章が先覚者であって、近頃これに倣う人はあっても、三具を弁別することなく勝手なあて方をしていて、標準とするに足りない旨を述べている。三具というのは富士谷語学の用語で「あゆひ」・「かざし」・「よそひ」の三つを意味するが、三具の区別をわきまえずに古言に俚言をあてた近頃の世の人の業績というのは、具体的にはどのような文献を指しているのであろうか。これについてわたくしは、本居宣長の『古今集遠鏡』や尾崎雅嘉の『古今和歌集鄙言』などを指していったのではないかと考える。これらは周知の通り古今集を俚言で訳した注釈書で、宣長の『遠鏡』は文化二年よりも八年前の寛政九年に、雅嘉の両序および和歌の『鄙言』はその一年前の寛政八年に刊行せられた。宣長は『遠鏡』が出てから四年後の享和元年に歿し、雅嘉は文化二年には六十五歳でまだ健在であった。宣長も雅嘉も近頃世に成章の里言訳の方法を「うちまねぶ人」であったということができる。松尾捨治郎氏は『遠鏡』が『あゆひ抄』を参考にして書かれたことを述べているが（『校注あゆひ抄』二九一頁・其他）、雅嘉もまた『あゆひ抄』には接していたに違いない。それらの人の書を御杖は「おほむね」の冒頭で貶めたのであろうと思われる。御杖の『古今集通詁』もまた古今集の口訳書の一つである。もしも御杖が宣長や雅嘉の古今集口訳を則とするに足るものとしたならば、かれらに後れて屋上さらに屋を架する同種の著述をはたして企てたであろうか。『遠鏡』や『鄙言』における口訳を三具の区別を弁えない私解であると見なせばこそ、御杖は父成章の樹立した語学に基づいて、古今集の正しい口訳

を示すために『通詁』を著わしたと解すべきであろう。従って、成章の方法に倣った近頃の世の人の口訳は則とするに足りないといった後、成章の口訳は『あゆひ抄』の大旨を見て知られるごとく、言語の本末通別を定めてなされたもので、「さるたぐひにあらず」と断言し、この『通詁』は成章の口述を参考として、口述に欠けた所は成章の精神を体して補ったということを述べなければならなかったのである。このように理解して、御杖が『古今集通詁』を著わした趣旨は明らかになると考える。

前引の「おほむね」の後半には古今集の口訳にあたり、古今の言語の相違について御杖の感じた所を述べている。「五種不翻」は仏語で梵語の仏典を漢語に訳する際に、玄奘の定めた不翻のことをいうが、この言葉は『あゆひ抄』大旨上でも古語の口訳の問題を論じた所に見え仏典漢訳の際に翻訳し難い五種類の語句の意に用いられているようである。御杖も『あゆひ抄』の用例に倣って用いたものと思われる。古えの歌の詞はただごとであったというのは、蘆庵の歌論を心得ていて述べたのであろう。御杖が蘆庵と直接にどれ程の交渉があったかは、中野稽雪氏の『小沢蘆庵』その他の著書によっても不明であるが、四年前の御杖が三十四歳の時まで生存したこの平安の大歌人の名声や主張を知らなかったはずはない。御杖と景樹とが親しい交りのあったことは、すでに明らかになっている。

「おほむね」の前記に続く文には、凡例とも称すべき記述があるが、その部分はここに全文を引用する必要がないと考える。その凡例の中には口訳の語に関して、

里言のうちに、たとへばのみという脚結に、バッカリ、シヾウなど、二様にあてたる所々あり。歌によりて里言をくるはせたるにはあらず。此事歌をよまむにも、ふみをかかむにも心えおくべき事なり。

といい、日本語の特色に関して、次のように述べた所がある。

わが御国のこと葉のつかひやう、から国などにはいたうたがへる事也。その故は、かの国は事々物々になきもじなくととのほりたり。ここにはただ音をもて、三千の森羅をもよくしらするわざなれば、これにてかれをさとる事つねなり。たとへば源氏物語に、「たのもしけれど、くびほそしとて、云云」といへるたぐひにて、まことに首のほそきをもいひ、又かくはかなげなるさまをもいふがごとし。いみじきなどいう詞も、おかしき(ママ)をも、うれしきをも、かなしきをも、くるしきをもいふたぐひなり。ひとつの心をえていくつをもさとす事、わが御国の言をつかふつねなれば、ふたつの里言をあてたるのみならず、すべて歌をもふみをも心えむにむねとすべき事なれば、ついでにいふ也。（文中の「　」筆者）

文中の源氏物語の言葉は帚木の巻に見えるものである。これに続いて詞書の訳に関することを記し、歌人の心得を述べて凡例の部分は終りとなっている。それを示すと左の通りである。

端作の詞を里する事、歌の詞とはたがへり。もと古今撰集のことがきは、撰者の奏覧のための詞なればなり。此ことを弁へぬ人、歌の端作は撰集がおやぞと心えて、すずろに侍る、まかる、たうべ、まうで、などかく人も世にみゆれば、序にこれをもいふなり。されば撰集のはみかどに申す詞なれば、ことにゐや〳〵しくかかれたり。さならでも、物語どもにもむかへる人ありていふ時は、いづれも此例なり。それらをもみあはせてこ

れを心うべし。

これらの文において御杖は歌よむ人たちの心得をも述べているが、『古今集通詁』を読む人として歌人たちを予想したからである。当時の京都の歌壇では、やはり古今集が重んぜられていたことは言うまでもない。蘆庵のただごと歌の主張にしても、景樹のしらべの説にしても、現代主義的な性格の強い歌論でありながら、なおかれらは古今集の歌に作歌の規範を求めようとしたのであった。御杖は堂上派の系統を承けた歌人であって、古今集を尊崇したことは当然であり、『古今集通詁』を著わしたのは、前述のように三具の区別をわきまえた正しい古今集の口訳書を作ることにあったとしても、誰を相手に古今集の正しい口訳を示そうとしたかといえば、これを作歌にたずさわる人々の参考に供しようとする目的のあったことは認めなければならないであろう。即ち『古今集通詁』は、歌学びをする人たちのために、古今集の正しい口訳を示さうとして書かれたものということができるのである。

二

『古今集通詁』における口訳は、御杖によれば、前記のごとく成章の口訳を主体として成立したものである。御杖は成章の口訳が言葉の本末通別を定めてなされていることをいい、詳しくは『あゆひ抄』の大旨を見て知るべきであるといった。従って、『古今集通詁』における口訳が『あゆひ抄』に見られる成章の語学説に基づく所のあることは、おのずから予測せられるのである。しかも幼にして父を失った御杖は、父の遺著『あゆひ抄』を師として歌を詠み習ったのであった。『古事記燈』大旨「言霊弁」の冒頭に、御杖は次のごとく記している。

稚かりし時より、父が志にしたがひて歌よみならひしに、成元十二歳なりし時父をうしなひつれば、たゞ父がつくりのこせりし脚結抄をば師として、歌をのみよみわたりしに、……（下略）

このように『あゆひ抄』は御杖の若い日の歌学びの師であった。『あゆひ抄』のおびただしい用例歌の「あゆひ」に附した口訳は、その意味においても『古今集通詁』の口訳の中に活かされているはずである。ここにおいて、われわれは『古今集通詁』の口訳を、『あゆひ抄』の説との関係を中心にして考えてみることにしたい。

『古今集通詁』の口訳は全訳の形をとらず、本文の傍らに注記の形で示されている。巻頭の歌の場合を例に上げると、次の通りである。

ふるとしに春たちける日よめる（ネンナイノ マシタ ミマシタ歌トイフ字ヲ略ケルナリ 以下倣之）　在原元方

年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはむ今年とやいはむ（ネンナイ テシマウタコトジヤ ウカ ウカ）

「や」の右に黒丸のあるのは『あゆひ抄』におけると同じく「めぐらして心得る脚結」の印で、「いはウカ」と下にめぐらしてカと訳することを示す。歌の全訳は傍らに記された口訳を入れて、

ネンナイに春はきテシマウタコトジヤ。一とせをこぞといはウカ、今年といはウカ。

となる。ここに示された助動詞・助詞の口訳が、『あゆひ抄』に示された口訳と一致することは当然である。即ち「きにけり」を「きテシマウタコトジヤ」と訳しているのは、『あゆひ抄』巻四の五「去

倫」の「たちゐ」の条および同じく六の「来倫」の「何けり」の条に「にけり」を「テシモタコトヂヤ」と口訳すべき旨示しているのに適っている。「とやいはむ」を「といはウカ」と訳しているのは、『あゆひ抄』巻一の二「疑属」の「何や何」の第二「ささぬ中のや」に、「里、いづれも〔や〕を回はして、下の〔何〕に〔カ〕を付けて心得べし。」と説いているのと、同巻四の三「将倫」の「何む」の条で裏（＝言語主体自身の場合）の〔む〕は里言の〔ウ〕である旨説いているのとに一致した口訳である。（小稿に引く『あゆひ抄』の本文は、中田・竹岡両氏共著『あゆひ抄新注』の現代様式に近づけられた本文に拠ることにする。）

『古今集通話』の口訳はこのように成章の説が用いられており、語法を重んじた口訳であるといっても差支えがないであろう。その特色は『遠鏡』や『鄙言』の口訳に比較する時、さらに明らかであると考える。右の古今集の巻頭歌を宣長は『遠鏡』で次のように口訳している。

年内ニ春ガキタワイ。コレデハ、同ジ一年ノ内ヲ、去年ト云タ者デアラウカ。ヤッパリコトシト云タモノデアラウカ。

雅嘉の『鄙言』の口訳は次の通りである。

冬のうちに又春がきた。これでは、おなじ一年のうちの、きのふまでを、去年といふたものであらふか。やはりことしといふたもので有ふか。

「きにけり」を宣長は「きタワイ」、雅嘉は「きタ」と訳し、「とやいはむ」は両者ともに「とイウタモノデアラウカ」と口訳している。これらを御杖が「キテシマウタコトジヤ」、「といはウカ」と口訳しているのは、両者に比べると原文に即した文法的な解釈であるといい得る。こうした点について、先きに述べたように御杖は、宣長や雅嘉の口訳を「三具のけぢめをもよく弁へずして」私意をもって訳したものと見たのではないかと思われ、また「言の本末通別をさだめて里せられた」父成章の説を主体として、最も正しいと信ずる古今集の口訳を書くことを思い立ったのではないかと考えられるのである。

『あゆひ抄』に引かれた古今集の歌は四百首近くあるが、同じ歌が二回以上引かれている場合（内一回はその歌の語句が引かれている場合も含む）があって、延べ数にすれば四百何十首ということになるであろう。それぞれ或る「あゆひ」の用例や口訳などを示すために引かれていて、それらに付けられた「あゆひ」の口訳は、『古今集通話』における口訳に活用せられているものと予想せられる。次に古今集の四季歌の中から、『あゆひ抄』に完全な形で二回以上引かれていて「あゆひ」に口訳の付せられた歌を若干とりあげ、その予想について吟味をしてみよう。

まつ人もこぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな（春下・一〇〇）

傍線の脚結について『あゆひ抄』では「つる」に「タソノ」（巻五・て身・何つる）、「てけるかな」に「テノケタコトカナ」（巻五・て身・何てけり）と口訳を付している。この所を『通話』では「なイタソノ花」、「折ッテシマウタコトカナ」と口訳し、「つる」の訳は『あゆひ抄』そのままである。

契りけむ心ぞつらき織女の年にひとたびあふはあふかは（秋上・一七八）

『あゆひ抄』では、「けむ」に「タコトデアラウ」（巻四・来倫

・何けむ)、「かは」に「ト云モノカイノ」(巻一・疑属・何かは)と口訳をつけている。この所を『通詁』には「ちぎッタデアロウ心」、「あふノハあふノカイ」と訳していて、『遠鏡』に「約束シテオイタ棚機ノ心」、「アウノガアウノカ。ソレヤアウト云モノデハナイ。」と訳しているのに比べると、『あゆひ抄』の訳と同趣であることが明らかであろう。

まつ人にあらぬものからはつ雁のけさなくこゑのめづらしきかな(秋上・二〇六)

『あゆひ抄』では、「にあらぬ」に「デナイ」(巻四・有倫・たちゐ)、「かな」に「コトカナ」(巻一・詠属・何かな)と口訳を付けている。『通詁』でも「まつ人デナイ」、「めづらしイコトカナ」と同様の口訳を施している。

名にめでてをれるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな(秋上・二二六)

『あゆひ抄』ではこの歌を三回例に引き、「ばかりぞ」に「ノト云ブンヂヤゾ」(巻三・の家・末ばかり)、「にきと」に「テシモタコトデゴザルト」(巻四・去倫・たちゐ)と口訳を付し、また別に「ぞ」について、「ヂヤゾ」と口訳を付けて示している。(巻二・ぞ家・何ぞ)。『通詁』では「をッタばかりジャゾ」「おちテシマウタと」と口訳がある。「ばかり」の口訳については、『あゆひ抄』(巻三・同前)に「トイフブンと里すべし。これも靡を受けてはノトイフブンと心得べし。」と説き右の歌を引用してつけている口訳に従っていない。(靡は連体形あるいはその語尾の「る」「き」をいう。)「ばかり」は「バカリ」としておいた方が口訳として聞きよいと思ったからであろう。

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみゆきまれにこそみめ(冬・三三三)

『あゆひ抄』では、「が」に「ノガ」(巻三・の家・何が)、「め」に「ウズレ」(巻四・将倫・何め)と口訳を付している。「め」の方については「ただウと里してもよし。」といい、但し「何め」とよむ歌は多く係結びになった場合であるといって、「〔こそ〕を里言のままにみて勢をあらせてウズレと心得るもよし。」と述べ、右の歌を例に挙げている。『通詁』では「キエヌソノうへに」、「まれにナニヨリモみョウズレ」と訳している。「ナニヨリモ」という語を添えて「こそ」という係助詞の趣を表わす方法は、やはり『あゆひ抄』(巻二・ぞ家・あたる中のこそ)に説く所である。「キエヌソノうへに」は『あゆひ抄』の「きえぬノガうへに」をパラフレーズしたような言い方で、『遠鏡』の「マダキエヌウヘヘモ」という訳よりも『あゆひ抄』の訳に近いであらう。

右のごとく『古今集通詁』の口訳は成章の語学説を主体にしているといってよく、御杖が「おほむね」に述べている所を首肯し得るのである。然し『あゆひ抄』に説く所の口訳法から見て、不審をいだかせる口訳がないでもない。一例をあげることにする。『あゆひ抄』巻二・「ぞ家」の「何ぞ何」の第二「あたる中のぞ」の項には、下に係結びのある場合の係助詞「ぞ」の口訳法が説かれている。先ずその大原則として、

里、裏に「コチハ」と言ふ。表に「何カシラズ」と言ふ。

と説いているが、これは、言語主体自身の上の表現の場合の「ぞ」は「コチハ」、自己以外の他者の表現の場合の「ぞ」は「何カシラズ」と訳するという意味である。次にこの種の「ぞ」につき上に

来る語によって四様がある旨を述べ、それぞれの様の口訳法を説き、最後に古今集の歌を例にあげている。詳しくは『あゆひ抄』を参照されたい。ここには成章が引用して訳例を示した古今集の歌を抄記するにとどめる。

桜散る花の所は春ながら雪ぞ（ガ何カシラズ）降りつつ消えがてにする（春下・七五）

梅の花咲ける春べはくらぶ山闇に越ゆれど（何カシラズ）しるくぞありける（春上・三九）

長しとも（コチヤ）思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば（恋三・六三六）

残りなく散るぞ（ノガコチヤ）めでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ（春下・七一）

わがために来る秋にしもあらなくに虫の音聞けばまづぞ（コチヤ）悲しき（秋上・一八六）

これら『あゆひ抄』における「ぞ」の口訳を『通詁』の歌における口訳の場合と比較する時、表の「何カシラズ」は問題がないとして、右に裏の意味として「コチヤ」（コチハ）と訳してある「ぞ」が、『通詁』ではみな表の「何カシラズ」に訳されている。即ち、「ながイトイフヤウニモ、ナニカシラズ思ひヌカヌゾ」、「ちるハ、ナニカシラズ、カクベツナコトヤ」、「虫の音ヲキクト一番ガケニ、ナニカナシニ何カシラズ、悲しき」と口訳をしているのである。

「散るぞめでたき」の「ぞ」が裏であるか表であるかについては問題もあろうし、裏は表に通ずるものであるかも知れない。然し御杖の書ではなにゆえにこの種の「ぞ」をすべて「何カシラズ」と訳しているのであろうか。「鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ」（春上・一一）、「ちりなむ後ぞ恋ひしかるべき」（同・六七）などの「ぞ」も『通詁』では「何カシラズ」と訳し、『あゆひ抄』に示す裏の「コチハ」（コチヤ）を無視したかのような態度である。しかも結びを持つ「ぞ」を「ナニカシラズ」と訳することは機械的になっていて、序文の「よろづのことの葉とぞなりける」、秋歌上（二一二）の「あまのとわたる雁にぞありける」などの「ぞ」を「ナニカシラズ」と訳しているのは、成章の表の訳の活用であるとはいえ、口訳としては奇異な感じを抱かせる。

以上、『古今集通詁』について概略考察を試みたが、この書は『遠鏡』、『鄙言』に並べてみる時、近世における古今集の口訳書として最も語法的に訳が施されている点に特色があるといってよいであろう。そしてその語法的なものは富士谷家の語学から生じていて、特異な色彩の混じった学問的口訳を形作っていると思うのである。

――三五・六・五――